

平成20年度後学期 学生による授業評価アンケート調査（最終）

「アンケート結果に応じて」

所属部局	人文学部		氏名	堀 博文	
講義コード	2333003010		講義名	比較言語文化基礎論Ⅱ	
開講曜日	水曜日	7・8時限	専門科目	・ 全学教育科目	
授業回数	15回	休講回数	0回	補講回数	0回
				受講登録者数	92人
<p>成績評価に際し注意した事項</p> <p>成績評価は、主に期末のレポート（試験形式）に依ったが、出席点も多少加味した。レポートの採点にあたっては、授業で述べたことを十分理解し、設問に対して（箇条書きではなく）文章での確に答えているかを重視した。</p>					
<p>報告内容</p> <p>あいにくアンケート用紙を取り違えてしまったために、最終アンケートの数値結果を得ることができなかったが、今回の授業で心掛けた点や反省すべき点を述べて報告にかえる。</p> <p>この授業は言語文化学科の1年生のほぼ全員が受講していたので、他学科や他学年の受講生も合わせると90名規模のものであった。従って、基本は講義形式にせざるを得ず、毎回のことながら、全体的に一方通行の授業になった面は致し方ない。</p> <p>しかし、講義形式であっても、受講生が講義内容を十分理解できるように工夫はしたつもりである。例えば、授業の最初の方で授業に対する要望を出してもらったところ、板書を丁寧にするか、レジュメを配ってほしいというのがいくつかあった。この授業ではテキストを指定していなかったため、特に1年生の場合は、講義形式の授業に対する不慣れもあろうと考え、授業の流れが纏めるようにレジュメを配ることにした。ちなみに、板書のかわりにパワーポイントを使うという選択肢もあったであろうが、映像や表・グラフを多くみせる必要がないこの種の授業において、あのようなモノの齎す効果についてかなり疑問を持っているので、その選択肢は最初から除外していた。</p> <p>授業に際しては、内容を理解しているかどうかを学生に問いながら進めたつもりであるが、大人数の授業で堂々と手を上げて質問をする学生は全くいなかった。やはりそれでは不十分であろうと考え、区切りのいいところで、出席確認を兼ねて質問用紙を配り、授業の内容に関する質問を受け付けることにした。それらの質問の中から、私の説明不足から学生が誤解をしているのではないかという点に関しては、その次の授業で補足説明をし、それ以外の質問に関しては、その学生に個人的に回答するなどして、学生のもつ疑問をその場でなるべく解決するように努めた。</p> <p>授業内容については、その質問用紙などで、いろいろと感想を書いてくれる学生も多数おり、また、授業が終わった後に質問をしにくる学生もいるなど、ある程度、学生の関心を引き起こすことができたのではないかと感じている。言語文化学科の学生であるから、ことばに対する関心のある程度もっているのは当然であろう。しかし、例えば、言語学コースを選択した学生の数が少ないことをみると、その関心を学問的なものへと一層高めるのに、この授業がどれぐらい貢献したかという点に関しては、それほど大きくなかったのではないかと感じる。このような導入的な授業の難しさのひとつであると思う。</p> <p>ただ、学生が関心をいざくテーマが少しずつ変わってきているのも事実であろう。特に最近、自分が慣れ親しんだものに対しては関心を寄せるが、それ以外のものに対しては、自分には全く関係ないと切り捨ててしまう学生が多いように感じる。自分の関心あることが実はいろいろな問題に繋がっているという想像力がそもそも欠如しているのではないかという気がしてならない。こういった想像力は、大学に入ってからのというよりも、その前段階で培っておくべきものではないのだろうか。最近のゆとり教育の影響かどうか分からないが、高校の現場において、大学で学問をするというのはどういうことなのかをきちんと教えているのか、そもそもそういうことを教えらる先生が今の高校にどれぐらいいるのだろうか、最近の学生をみていて疑問に感じるものである。</p>					